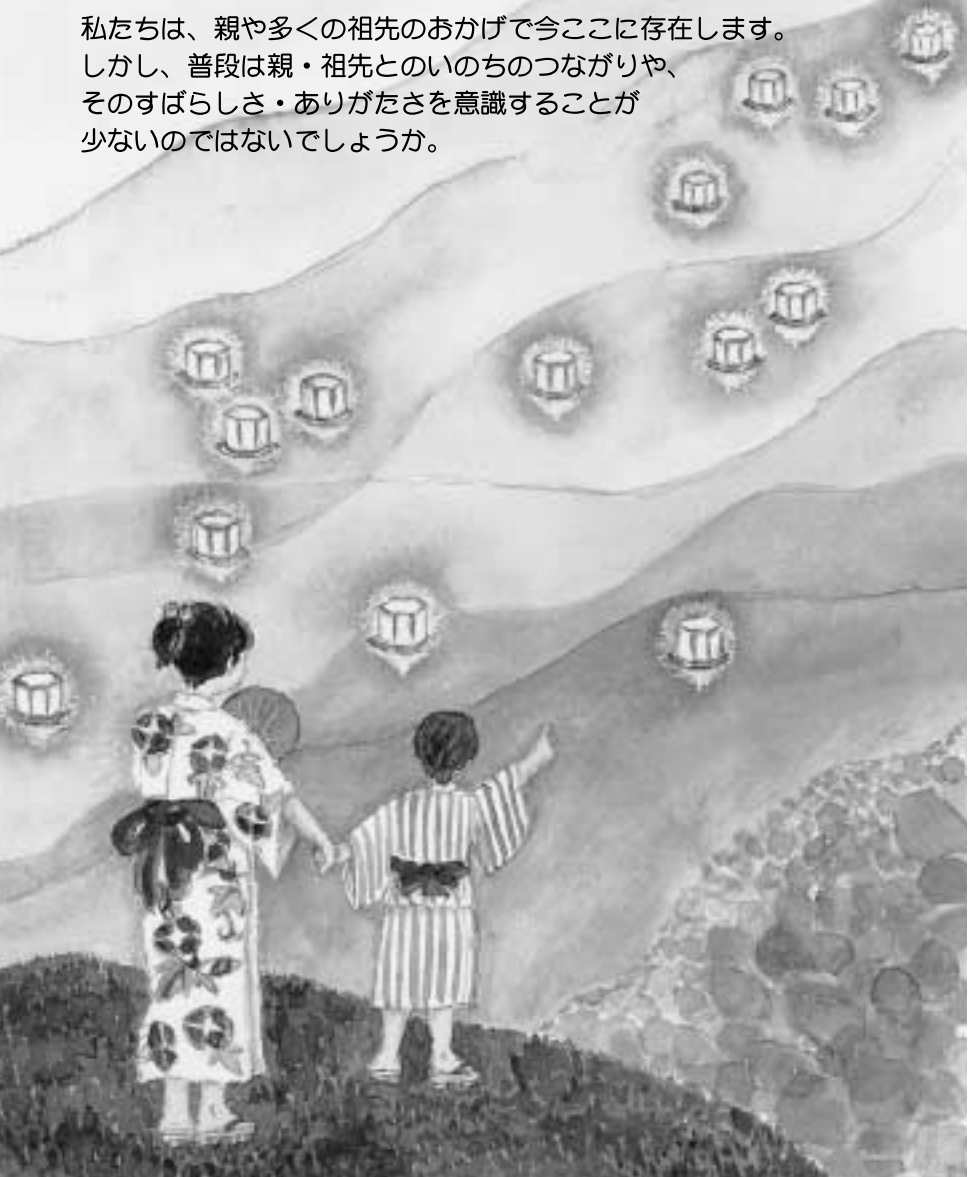


親を感じる、祖先を感じる

私たちは、親や多くの祖先のおかげで今ここに存在します。
しかし、普段は親・祖先とのいのちのつながりや、
そのすばらしさ・ありがたさを意識することが
少ないのではないのでしょうか。



清一さんと和子さんの心配事



都内に住む田中清一さん(45歳)は、妻の和子さん(40歳)と清一さんの母キヨさん(74歳)、そして一人息子の中学二年生になる武くん(たけし)の四大家族です。

学校が夏休みに入った最初の日曜日。清一さんは二階から降りてきた武くんに声をかけました。

「武、夏休みは何か予定でもあるのか？」
「……別に」

「だったら、家でぶらぶらしてないで、ちゃんと勉強しろよ」

「うるさいな、ほっといてくれよ」

武くんは、「面倒くさそうに答えて、すぐ

にまた二階の自分の部屋に戻っていつてしまいました。そんな武くんの様子を見て、清一さんは「困ったもんだ」と、小さくため息をつくのでした。

実は、武くんは中学二年生になってから、口数がめつきり少なくなり、清一さんや和子さんが話しかけても、いつもぶつきらぼうな返事ばかりで、自分から話しかけてくることもほとんどありません。清一さんたちは、「思春期だから仕方がない。麻疹はしかみたいなもの」と思いつつも、武くんとの会話が少なくなったことがいつも気がかりでした。

武くんの夏休みの宿題

ところがその日の夕食のときは、いつもと様子が違い、武くんのほうから口を開きました。

「あのさ、おばあちゃんにちよつと聞きたいことがあるんだけど」

「えつ、私に？ いったいなんだい？」と、キヨさんは箸を止めて武くんに尋ねました。

「夏休みの宿題の中で、いくつか自由選択の宿題があるんだけど、僕は『おじいちゃんやおばあちゃんが中学生だったころ』という作文を選んだんだ。だから、おばあちゃんが十四歳ごろの話聞かせ



てくれないかな」

「ほお、学校でそんな宿題が出たのか。うちは三世代家族だから、たつぷりと」おばあちゃんの青春時代」の話が聞けるぞ」

と、清一さん。

清一さんと和子さんは、めずらしく武くんから話をしてくれてうれしそうです。キヨさんもそうした息子夫婦のうれしさを察してか、笑顔で自分の子どもころの話を始めました。

「おばあちゃんは呉服問屋の一人娘でね、おてんばだったけど、小さいころから本を読むのが大好きで、学校の成績もとても良かったんだよ。」

でも、武と同じ年ぐらいいるときは戦争中だね。今でも覚えているのは、終戦間



近の八月に、町が空襲で一面焼け野原になったこと。幸い、私はお父さんやお母さんと隣村の親戚の家でお世話になっていたから助かったけれど……。

もし空襲で死んでいたら、亡くなったおじいさんとも結婚してないし、清一も

生まれてない。もちろん武だつて今ここにはいないのよ」

キヨさんは武くんにそう話しました。

それを聞いていた和子さんが、

「おばあちゃんがいてくれて、よかつたわね」と、武くんに話を向けると、

「ウン、そうだね」と小さく答えるので



した。

「ところで、和彦おじいちゃん（清一さんの父）とはどうして結婚したの？」

武くんは話題を変えました。キヨさんはちよつと照れながら、

「おじいさんとは又いとこ同士でね。実は、私にはほかに好きな人がいたんだけど、終戦後、兵隊から戻ってきたおじいさんから猛烈にアタックされて、結局根負け。私が一人娘だったから田中家の養子にきてもらうことになったんだよ」と答えました。

「へー、おじいちゃんもやるじゃん！」

いつもは食べ終わるとすぐに自分の部屋へ戻る武くんでしたが、今夜の夕食はキヨさんの若いころの思い出話に、家族の会話も弾んだのでした。

「家族史」作りを思い立つ



夕食の後片付けも終わり、食卓には清一さんと和子さんが残りました。

「今夜は、お義母さんからいろいろな話を聞けてよかったわ。それに武とも話ができたし」

「いつも無愛想で、心配ばかりかけるけど、まあ思春期の時期はある程度仕方ないさ」

「そうね。……ところで、今夜のお義母さんの話、あなたは今まで聞いたことあった？」

「うん、でも断片的な話しか聞いてこなかったけど」





「私ね、お義母さんが、もし空襲で死んでいたら、あなたや武が生まれていない」という話を聞いて、高田好胤さん（元・

薬師寺管主）の『母』という本の一節が頭に浮かんできたの。ちよつと古い本だけど。



両親や先祖とのつながりのことが書かれていたわ……。今、ちよつと持つてくるわね」
和子さんはそう言うのと、本棚から一冊の本を持つてきました。

◇ — 私たちはみんな、お父さま、お母さまから生まれてきました。お父さま、お母さまもまた、ご両親から生まれてこられました。こうして二十五代（仮に二世代を三十年として七百五十年）さかのぼりますと、私たちのご先祖の数は三千三百五十五万四千四百三十二人になります。
◇ （中略）私たちの生命はこんなに大変な数

のご先祖さまが、いま、私たちひとりひとりの生命になってくださっているのであるということを見覚えねばなりません。(中略) 大変な数のご先祖さまの喜び、悲しみ、その他諸々の精神的、肉体的経験が、私たちひとりひとりの血の中に流れて、そのお蔭で生かしていただいているのだ——

◇ (高田好胤著『母』より)

「三年前、実家の父が病気で亡くなる少し前にこれを読んだの。父と私とのいのちのつながりが感じられて、涙が止まらなかったわ」

と、和子さんが言いました。

「ご先祖というと遠い過去の人のように思うけど、和子にとっては三年前に亡くなったお義父さんで、僕には八年前に亡

くなったおやじが、いちばん近いご先祖になるわけだ」

「あなたは、おじいさんやおばあさんのことは知っている？」





「おじいちゃんやおばあちゃんとは離れて暮らしていたからな。特に、おじいちゃんは僕が生まれる前に亡くなっているから、全然知らないんだよ」

清一さんはそう答えると、しばらく何かを考えている様子でした。

「この前、新聞で『自分史』作りの記事があつて、なかなか面白い。自分の人生を振り返る意味で僕も作ってみようかな」と思つたけど、家族の歴史を振り返る『家族史』も面白いかもしれないなあ……。もう一度おふくろに話を聞いて、『田中家の家族史』でも作ってみようかな」

「いいアイデアじゃない。私も、お義母さんが元気なうちにいろいろとお話を聞いておいたほうがいいと思うわ」

和子さんの言葉に促されるように、清一さんはうなずきました。

「武の宿題にも役立つかもしれないし。よし、いつちようやってみるか」

清一さんはそう思い立ち、次の日曜日にあらためてキヨさんから話を聞くことにしました。

わが子の回復を祈る親の心



次の日曜日——。

清一さんは、武くんを連れてキヨさんの部屋へ行きました。

「おや、武もいつしかい？」

「お父さんが、夏休みの宿題に役立つからって言うから……」

ちよつと不機嫌な武くん。しかし、清一さんは一向に気にすることなく、キヨさんに田中家の「家族史」作りを思い

立ったことを話しました。そのうえで、

キヨさんの若いころの話や両親や祖母、さらに親戚の人の名前とその関係なども聞かせてほしいと頼みました。

キヨさんの話は、まず祖母の綾さん（清一さんの曾祖母）の話から始まり、次に、父・繁治さん（清一さんの祖父）の思い出へと続きました。

繁治さんは若いころアメリカ製の自動車に乗っていて、ハンドルを切りそこねて田んぼに突っ込み、その車を台無しにしたという面白い話も聞けました。キヨさんの話は断片的なエピソードでした

田中家の

家族史



が、これまで清一さんが名前を聞いたこともない親戚の話も出てきました。

夫の和彦さんとの結婚後の話になると、幼いころ病弱だった清一さんの話へと話題が移っていきました。

「清一は、幼稚園に入園する前に入院したこと覚えてるかい？」

「うっすらだけど覚えているよ」

「喘息と高熱が何日も続いてね。病院に入院しても、高熱が全然引かず、お医者さまから『覚悟してください』とまで言われたのよ。おじいさんも私も、もう必死で、交替で寝ずの看病をしながら、神さまに『どうかこの子をお守りください』とひたすらお祈りし続けたの。」

おじいさんも、まだ四十代前半で若かったけど、清一の病気を心配して白髪

がぐんと増えてねえ。それにあのころは、タクシーで病院まで行っていたけど、清一の看病にいつでも行けるようにと、急いで運転免許を取って、思い切った車を買ったのよ」

「車を買ったのは僕の看病のためだったの？ 全然知らなかった」

清一さんは、幼いころに大きな病気をしたことは聞いていました。ところが、あらためてキヨさんから話を聞いて、自分の命を救うため、神さまに祈り、必死に看病した両親の深い愛情を感じました。

清一さんは「親とはありがたいものだなあ」と、しみじみと感じたのでした。そして、ふと横を見ると、武くんもキヨさんの話に聞き入っていました。



祖先としっかりとつながっている



清一さんは土曜・日曜の休日を利用して、キヨさんの話をパソコンに入力していききました。古い昔の家族の写真もパソコンに取り込んで、文章と関連付けて整理していききました。さらに親戚の名前も入れ、そのつながりも加えていくと、田中家を中心とした写真入りの「家族史」ができあがっていききました。

そんなある日のこと、武くんが清一さんの部屋にやってきました。

「お父さん、家族史はできそう？」

「少しずつ形になってきたぞ。武こそ、夏休みの宿題はどうだ？」

「お父さんの家族史よりはずつと簡単だから、なんとかなるよ。……お父さん、あのね」

「うん、何だ」

「この前、おばあちゃんの話をやつくり聞けて、よかったよ。お父さんの小さいころの話やおじいちゃんの話、それに僕の知らない曾おじいちゃんや曾おばあちゃんの話もあつて面白かった。話を聞きながら、何か不思議な感じがしてさ」

「不思議な感じ？」

「うん、僕は、うちは四人家族だとばかり思っていたけど、亡くなったおじい

こんなに多くの方が 見守ってくれている



ちゃんや、曾おじいちゃん、曾おばあちゃん、それにもつと前の人ともつながっているんだなあと思えてきて、何か不思議な感じがして……」

「実はね、お父さんも同じように感じたんだよ。普段あまり意識しないけれど、武やお父さんの体はね、たくさんのご先祖さまと見えない絆きずなでしつかりとつながっているんだよ。だからそう感じたんじゃないかな、きつと。お父さんはそう思うな」

清一さんの心の中に、〃田中家のご先祖さまが武を見守ってくれている〃という安心感が大きく広がっていきました。そして、武くんに対する心配やわごととも和らいでいくように思えたのでした。

* * *

小説家・吉川英治えいじ氏は、両親のことを

次のように回想しています。

——もう両親はおらぬが、私は両親に
会おうと思えばいつでも会えるのです。

それは私の脈をみるのです。私の体の中
に、いつでも両親も祖先も生きていてく
れるのですから、誰だれでも両親に会おうと
思えば何時いつでも会えるのです——

私たちの体の中には脈々みやくみやくと両親もご祖
先も生き続けています。多くの親やご祖

先が、次の世代のわが子を慈愛じあいの心で守
り育ててきたからこそ、今こうして私た
ちはいのちをいただき、生きてるので
す。

その親や祖父母、祖先とのいのちのつ
ながりを感じるをとき、私たちは自分一人
の力で生きているのではなく、生かされ
ているのだと感じ取ることができるとは
ないでしょうか。

